月下氷人

島村洋子

月下氷人

島村洋子

月下氷人（げつかひょうじん）

一九九七年五月二五日初版印刷
一九九七年六月七日初版発行

著者　島村洋子（しまむらようこ）
発行者　笠松巌
発行所　中央公論社
〒104　東京都中央区京橋一-八-七
電話　販売部〇三（三五六三）一四三一
編集部〇三（三五六三）三六六四
振替　〇〇一二〇-四-三四

印刷　大日本印刷
製本　大日本印刷

Printed in Japan CHUOKORON-SHA,INC.
© 1997 Yoko SHIMAMURA
ISBN4-12-002701-5 C0093

定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

目　次

月下氷人……5
くすりゆび……25
セクシュアル・ヒーリング……53
＊
恋コロン……77
あとしまつ……115
前後賞……143
＊
秋日和……169

装幀　木村　裕治
装画　八木　美穂子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

月下氷人

月下氷人

The Fiancée and the Man

床の間の金の鶴やら亀やらを眺めながら、鈴子は夫となる人の父の自慢話を聞いていた。
夫となる人の父はもう数が少なくなった宮大工である。
もう六十が近いのに、腕の太さは痩せた夫となる人よりも立派である。
有名な神社のほとんどの修築工事は請け負ったと言う。
鈴子が中学のときの修学旅行で行った、あの大きな旧の一級官幣神社の修繕を彼がしたとき、御神体とされている鏡の入っている箱を開けたらそれはそれは立派な青大将がのっそりと鎌首をあげて出て来た話をまたし始めた。
初めて鈴子が挨拶に行ったとき、
「大学に行った女の人と口をきくのは初めてだから」
と冗談のように言いながらお酌してくれた彼がしてくれた話である。
いえ中退ですから、と鈴子は言おうとしたけれど、そんなもの謙遜とも言えないただの話の腰折りなので、やめた。

青大将が鎌首をあげる描写がとてもリアルだったので、そのとき鈴子は声をあげた。
こうして会うのは三度目であるが、あれから必ず彼は青大将の話をしてくれる。
気を使ってくれているのだ、と思うと鈴子はまた喉の奥が詰まりそうになった。

幾久しく、と仲人の宗佑さんが言った。
ああ幾久しく、と鈴子も思う。
夫となる人の膝は少し揺れている。
あの貧乏ゆすりが気になるのよ、と母は最後まで難癖をつけたけれど、父はいいじゃないか、鈴子も鈴子なんだからと言いたげに、俺も昔は貧乏ゆすりくらいしたもんさ、自信ができたらそんなものは自然としなくなる、と言った。
鈴子も鈴子なんだから。
私も私なんだから、と鈴子は息をついた。
鈴子が心中事件の生き残りとなったのは十九の夏のことだ。
台風が例年になく多い年で、あのときの波も高かった。
鈴子は浜に打ち寄せられ、ちょうど夜釣りをしに来た大学生に発見された。

相手の男の遺体が見つかったのは翌日の朝である。
新聞には仮名で記事が出たけれど、週刊誌の取材はかなりしつこくあった。
あれから十年、家族で引っ越しもして、大学もやめて、控えめに控えめに生きて来た。
別に自分のしたことを恥とも何とも思わなかったけれど、年々、記憶が新しくなるようなのには閉口した。
弟の宏一の靴下の柄を見てはあの男を思い出し、洗面所の安全カミソリに付着しているひげの残りを見てははっとする。
鈴子の左手は男の背骨の感触を覚えている。熱い背の中心のごりっとしたかたい骨を。
相手の男の妻もこうして過ごしているかと思うと、どうしたらいいかと息をつく。
何しろ、死んでおわびをするわけにはいかない。
それが一番の自分の大望であることは、周囲が承知しているのだから。
ひっそりひっそりしていようと思って十年経った。
誓わなくてもあれから一部の空気がぬけたように、日々が過ぎる。
何にも執着しないし、何にも欲しいとは思わない。
しかしただだいろいろなものが不思議に懐かしく、下駄を見れば下駄が懐かしく、犬を見

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

れば犬が懐かしく、葉を見ればいちいち愛しくて困った。
あの人はもうこの葉を見ない。

仲人の宗佑さんはかつての父の部下である。
新入社員のときからどういうわけか人付き合いの悪い鈴子の父になついてかわいがられ、独身時分はしょっちゅう、夕食を食べに来た。
鈴子は小学生のころから宗佑さんにかわいがられて来たので、もう血がつながっていないという気がしない。
あれから宗佑さんは同じ課の女性と結婚し、鈴子の両親が仲人をした。
そして今日は宗佑さん夫婦の恩返しとなった。

あの事件のときも相手の男のことを全く質問しなかったのは宗佑さんだけである。
宗佑さんはすいかを持って来て、いつもと同じようにバケツにつけた。
そして布団に横になっている鈴子に向かって、
「あとですいか、たたかせてやるからな。今日のはまちがいないから」

と言った。

宗佑さんは熊本の果物屋のせがれで、すいかをたたいた音で熟れた甘いのとそうでないのを見分ける名人だった。

それを小さいときから直伝された鈴子は、いつのまにか宗佑さんよりも甘いすいかを見分けるのがうまくなり、いつも彼の土産のすいかをたたいては難癖をつけていた。

父と母は引っ越しのしたくでおおわらわだった。

鈴子は天井だけを睨んで暮らした。

「ほれほれ」

と宗佑さんは冷えたすいかを抱えて鈴子の枕元まで持って来て、鈴子に指で弾かせた。

ばすん、と鈍い音がした。

「甘くないと思うわ」

鈴子は十日ぶりに声を出した。

夫となる人がくれたダイヤの指輪は小粒だけれどカットが美しい。

宗佑さんは挨拶も終わり、どれどれと鈴子の薬指を眺めている。

このどれどれと、あのときすいかを持って来てくれたほれほれは全く同じ声である。
いつも同じ調子のいつも同じ温かい水が底を流れている。
宗佑さんの奥さんは二言目には、
「だめよ、うちのは本しか読まない朴念仁(ぼくねんじん)だから」
と言う。
そういえば奥さんの着物の襟のあわせはゆるい。

たいして大きなものではないが、鈴子の今、住んでいるところの近所の神社で修築があり、夫となる人が毎日、鈴子の手伝っている喫茶店に休憩に来た。
毎日、毎日、休憩に来るので始めはそんなにコーヒーが好きなのかと鈴子は思った。
その次にはテレビが見たいのだなと思い、その次にはスポーツ新聞を読みたいのだな、としばらく思い、ついに鈴子は彼の見たいものは自分だ、と思うに至った。
特別に話はしなかったけれど。
彼は美しい筋肉を持っていた。
何かの拍子に立ち上がったりすると、肩から二の腕にかけて光が散って落ちるような気がし

た。
ああ、もっと見たい、と鈴子は思った。
修築工事が終わるまで、結局、彼は何も話さなかった。
笑うことすらなかった。
しかしもう鈴子の意志ではなく、鈴子の目が彼の腕から離れなくなっていた。
修築工事はとっくに終わったのに、宮大工は相変わらず毎日やって来て、ついにマスターが鈴子に、
「かわいそうだから何とかしてやってよ」
と言うようになった。

口を利くようになったのは店が臨時休業をした日である。
マスターの実家のお母さんの具合が急に悪くなり、その日は臨時休業になった。
別に家にいてもたいして用がない鈴子はいつもの時間に店に来て、かたづけものをして帰るつもりだった。
「あ」

臨時休業の張り紙を見て、帰ろうとする姿が窓ごしに見えた。
鈴子はあわてて立ち上がり追いかけた。
追いかけた、あの光輝く太い二の腕を。
自分が恋をするとは思えなかった。
いつも片肺で生きている気がしていた。
ただただ放っておけないような気がして、追いかけた。

公園を二周ぐるぐるまわり、
「宮大工の人って、神社でお祈りはしないんですか？」
と我ながらつまらない質問をした、と鈴子が思って恥ずかしくなったそのとき、
「しませんよ。いつも祈りながら建てていますから」
と言う声とともに光が降って来た。
肩や二の腕だけではない、彼の頭上、背中、空の上から。
「みんなの祈りを受け止める所ですから、それを受け止められるように祈りながら建てています」

次の言葉が終わらないうちに、鈴子はぽろぽろ泣いていた。
この十年、泣いたことなどなかった。
あのすいかを枕元でたたいたときだって涙は出なかったのに。

最後にみんなで桜湯を飲んだ。
桜湯やコブ茶を飲むのだ、めでたい席では。
ちゃちゃが入る、というのを嫌ってお茶は飲まないらしい。
つつがなく、と誰かが言い、つつがないというのはどういう意味なのかしら、と鈴子は宗佑さんのほうを見た。
宗佑さんは物知りで特に故事来歴には本当に詳しい。宿題のときに何度も鈴子は助けてもらったことがある。
結納も無事終わり、みんなで駅までゆっくりと歩いて行くことになった。
「つつがない、ってどういう意味？」
鈴子は立ち上がりながらたずねた。
「つつがない？　ああ、それはね。病気がない、と言う意味なんだよ。つつが、ってつつが虫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo